

橋爪貫一『續世界商賣往來』の種本

@kzh r (Tw i F U L L 文學部)

oo.kzh r@gmail.com

一 發端

幕末・明治前期に洋學者に橋爪貫一なるものありて、あまたの啓蒙書を著せるなかに、『世界商賣往來』のごとき往來物をもものしたり。『世界商賣往來』は明治草々の漢語を見るによしとて重寶さるによて、總索引を編みつるもあれど、わづらはしき文獻學の手はずを厭ひにしか侍るらん、その由縁を求めずにてなむ。『世界商賣往來』は正・續・續々・補遺・追加の五編を數ふるにいたれば、ちかごろ舉ありてその由來を尋ぬるを見しも、『續世界商賣往來』には及ばずであり。われ、その由來をたま／＼見いだしけれど、ことさら論ふべきほどのことにもあらねば、ここに記して覺えとなすばかりなり。管見いちじるしきにして、つとに説かれしことどもも侍らめど、ねがはくは寛容の目もて遇せられんことを。

二 橋爪貫一について

橋爪貫一（一八二〇・八四）は、江戸・東京を生きた英學者であり、その著は八十餘篇を數へるといふ。英學は、村山（二〇〇三）には海軍兵學校にて身に付けしものとする。その生涯には不明な點が多い。

その著作は廣く受け入れられ、『世界商賣往來』（一八七二）のほか『童蒙必讀』（一八七〇・二）などは、一八七二年の「小學教則」において單語讀方モトバノヨミカタの教科書として舉げられるほどであった（府川、二〇一四）。千葉（二〇〇六、三三）によれば、舞姫論争で著名な石橋忍月の通ったころの福岡縣上妻郡の小學校では、『童蒙必讀』を教科書として用ゐてゐたといふ。『續世界商賣往來』も同様で、村山（二〇〇三）には三十二）
 一）なほ、千葉（二〇〇六）は『童蒙必讀單語篇』と讀みなすが、いふまでもなく『童蒙必讀』・『單語篇』の誤り。

八點の殘存が確認されてをり、大小七次の異刷が認められてゐるほどである。

げにもあるべきはなしではあるが、橋爪は知識人受けしなかつたものらしい。『續世界商賣往來』に序して、

或人曰、世ノ著作家ト稱スル者ニ、三等有り、高明正大之言ヲ以テ、士民ヲ獎勵スル者、之レヲ上等トシ、其之ニ倣テ、而力稍ミ劣レル者、之レヲ中等トシ、瑣ミ之片句隻言ヲ以テ、而閭巷之細民ニ告クル、松園子ノ如キ者、是レ之レヲ下等ト謂フ、然レトモ不化之俗耳ヲ針砭スルノ之功、最モ多ニ居ルト

との世評を傳へ、それに對して、世の教化から遠ざけられた不學の民の多さを思へば、自らがすこしでも世の教化の役に立ててゐるのであれば、このやうな評はむしろ喜ばしいと述べてゐる。評の適否はともかく、『小學教則』に選ばれたところなど、たしかにまったく無用だったとは思はれない。

三 『續世界商賣往來』について

『續世界商賣往來』は、見てのどほり『世界商賣往來』の續編であつて、正編の好評を承けて刊行されたものである。府川（二〇一四、二二）が「傳統的なもの盡くし往

來本の體裁を採つてはいるが、同時に「英和辭典」的な要素も合わせ持っている」と評することく、『世界商賣往來』は、もと／＼商賣往來的な用語の羅列と、英語の紹介を同時に行はうとしたものであった。じつさい、『世界商賣往來』の冒頭から、「世界商賣往來／當今貿易大に開け…」とある上段に、『World: 世界／Commerce: 商賣／Appresent: 當今／Change: 貿易／Greatly: 大ニ』のごとくに書かれてゐる。片假名による読み方のくせなどは、すでに谷（一九八九）にあらあらが検討されてゐる。

『世界商賣往來』は、そも／＼『商賣往來』といふ往來物のなかでも廣く流布した書物の形式を襲つたものである。『商賣往來』は、江戸中期に商人向けにつくられた往來物で、往來物の名の示すとほり、手紙（往來）の文面を通じて物事や表現を學ばせようとしたものである。ものによつては、事物の名を示したのちに圖解を施すものもあり、見た目の親しみやすさが好評を博したものであらう。文字と読みを同時に學ばせる

のために、文字は大きく、また読み假名がすべての漢字に振つてあるのがよくある體裁であつて、それは『世界商賣往來』も共通し、舶來の品々の名前が圖解入りで並べられてゐる。

『續世界商賣往來』も同様に西歐の文物を圖解しつゝ羅列し、上段に英單語とその讀みと譯を附すかたちを採る。圖に示したのは十一丁である。つぎにこの本文を鵜刻したものを示してみよう。

絲髮。藍色白綠色黑色棕色。朱色に寶藍
二藍。天青紫色洋藍。土靛棉花丹參
胡麻金綫縹。皮革羊毛輕裘洗身衣に
蓑衣涼帽。帽子に脚嗑襪頭

云々。絹絲とすれば濟むものを絲髮とするがごとき漢語の特異さもさることながら、朱色を「べにとびいろ」と訓むなど振り假名も特異である。「べにとびいろ」は、紅鳶色と書き、『日本國語大辭典』第二版を見るかぎり、朱色と書いてかく讀ませるものは見當たらぬ。この短いなかでも、『續世界商賣往來』において、あきらかに異色の語彙が用ゐられてゐることが分るだらう。

『續世界商賣往來』の十一丁がとくだん異色なのではなく、だいたいこんな調子である。なぜだらうか。

圖 『續世界商賣往來』 十一丁



四 『續世界商賣往來』が福澤諭吉『増訂華英通語』を種とすること

それは、『續世界商賣往來』に種本があるからである。『續世界商賣往來』の種本（のひとつ）に、福澤諭吉の『増訂華英通語』（一八六〇）がある。『増訂華英通語』は、清

の子卿『華英通語』(一八五五)なる英中對譯辭書に、英單語の讀みを片假名で示し、漢語の脇に片假名で日本語譯を附すといふ體裁のものである。矢放(二〇一五)によれば、子卿の用ゐた言語は廣東語であるとのことで、古典漢語ではないやうである。福澤は、この『華英通語』を萬延元年遣米使節に隨行した際、サンフランシスコにて購入したといひ、この『増訂華英通語』は福澤がはじめて刊行した本とのことである。さきの『續世界商賣往來』の翻刻箇所から『増訂華英通語』の利用を具體的に見てみよう。『續世界商賣往來』の表記につづけて、『増訂華英通語』の漢語・和語・英語表記、所在(ページ番號、特記なければ上巻・行番號・列番號)の順に示す。英單語の讀みは割愛した。

絲髮 絲髮 Silk, 71-2-1
藍色 藍色 Blue, 53-2-2
白色 白色 White, 53-3-2
綠色 綠色 Green, 53-4-2
黑色 黑色 Black, 53-6-2
棕色 棕色 Brown, 53-7-2
朱色 朱色 Carmine, 53-1-1

四) だからこそ特異な語に氣附けたといふこともある。

寶藍 寶藍 Darkblue, 53-2-1
二藍 二藍 Light blue, 53-3-1
天青 天青 Azure blue, 53-5-1
紫色 紫色 Reddish gray, 53-7-1
洋藍 洋藍 Indigo, 53-8-1
士靛 士靛 Indigo, 68-5-1
棉花 棉花 Cotton, 67-1-2
丹參 丹參 Madder, 69-7-2
胡麻 胡麻 Hemp, 68-3-1
金綫 金綫 Gold lace, 69-2-2
皮革 皮革 Fur, 67-5-1
羊毛 羊毛 Wool, 73-1-2
輕裘 輕裘 Fur dress, 67-6-1
洗身衣 洗身衣 Bathing dress, 1-27-4-2
蓑衣 蓑衣 Rain cloak, 48-7-1
涼帽 涼帽 Summer hat, 49-8-1
帽子 帽子 ナン
脚襪 脚襪 Garters, 49-1-1
襪頭 襪頭 Sock, 50-5-2
このやうに、帽子以外のすべての語が

五) Furの譯語としては『増訂華英通語』が正しいが、草書の字體が酷似してゐるからか、古典漢語ではないからか、誤解させやすい附訓に引きずられたからか——『和英語林集成』では、初版以來、furの譯を「けi:kawa」とし、このときはまだkagawaではなからしい——いづれにせよ『續世界商賣往來』は誤り。
六) ハットのつもりだったのかもしれないが、

『増訂華英通語』に由來するものである。藍色・金綫のやうに和語をわづかに改めたものもあるが、ゆゑあつてのことかは分らない。色の名のやうに、列を縦に採つていつてゐるやうなものもある一方、服飾に關してはかなりあちこちから採つてゐるのが分る。洗身衣・蓑衣・涼帽・帽子・襪頭に關しては、圖解があるが、『増訂華英通語』は文字ばかりで圖はいっさいない。どこから仕入れてきた畫なのか、考へを持たない。橋爪は、著作を仕立てるのに粉本をかなりだいたんに使つたもののやうである。關場(一九九三)は、橋爪の『捷徑七ツ伊呂波』(二八七〇)が阿部爲任『捷徑七ツ伊呂波』(二八六七)の英語部分をフランス語に置き換へただけにすぎないことなどを指摘するし、丸山(二〇一五)は、『世界商賣往來』の種本のひとつとして『英單語篇注解』を指摘してゐる。それからすれば、本書に種本があるのもふしぎなことではない。

五 結語

本稿は論文たらしめたものではないので、『増訂華英通語』が『續世界商賣往來』に『増訂華英通語』に「帽子」といふ譯語はない。

の種本の一であることを示唆するに留め、なにをどれくらゐ引用したのか(續編以外の「世界商賣往來」ではどうか)のか、『増訂華英通語』のどの版を用いたのかとといったことどもも含めて、ほかに種本としたものがないのかなどといったことがらには踏み入らない。『續世界商賣往來』の表現には由來があるといふことだけ示せばよい。表現の由來が分ればよいといふものでもないが、文獻がほかのものと孤立無縁に存在することはない以上、由來があることを示すのは有意義かは同日の談にあらざるとて無意味なわざではない。

『世界商賣往來』に留まらず、『續世界商賣往來』に種本があるといふことは、たんにそれに留まることではない。櫻井(二〇一三)は、未見だが、タイトルから察するに『増訂華英通語』を種本としたものは『續世界商賣往來』以外にもあったものらしい。だとすると、『續世界商賣往來』は、『増訂華英通語』の、あるいは明治初期における英語を譯した表現の受容の動向を反映したものとして捉へ直すことができる。

七) 因みに云ふ、橋爪の「盗用」常習者たる、住時の通弊なりとて擁護せんとすにあらず、たゞ死者を鞭打つを慎むのみ。

弄月亭『童蒙漢語圖解』(一八七〇)の序文にかくいふ、
天朝の御布令。中諸侯の建奏。下市俗の論議及び遊女弦妓の雜談迄。漢語を交えざるはあらじ

と。このやうな世に、ひとくくはどのやうな思ひで『續世界商賣往來』などを繙いたのだらう。『増訂華英通語』の表現が多いうまに傳はらなかつたことを含めて、本書はその時代を色濃く示すものである。

文獻

櫻井豪人(二〇一三)『對譯名物圖編』の譯語について『増訂華英通語』『英語箋』と一致する譯語を中心に「人文コミュニケーション學科論集」一五

谷清子(一九八九)「世界商賣往來系に採られた英語教材 比較教育學的視點からの考察」『人間研究』一二五

千葉眞郎(二〇〇六)『石橋忍月研究 評傳と考證』八木書店

府川源一郎(二〇一四)『明治初頭國語教科書と子ども讀み物に關する研究 リテラシー形成メディアの教育文化史』ひつじ書房

丸山健一郎(二〇一五)「橋爪貫一『世界商

賣往來』依據資料試探」日本語學會二〇一五年度秋季大會、山口大學

村山昌俊(二〇〇三)『明治時代語論考』おうふう

矢放昭文(二〇一五)「福澤諭吉と『増訂華英通語』」『京都産業大學日本文化研究所紀要』二〇

橋爪貫一『世界商賣往來』は國立國會圖書館藏本(村山の分類ではA類エ)、『續世界商賣往來』はミシガン大學藏本(村山の分類ではA類エ)、『増訂華英通語』については慶應義塾大學藏本を用ゐ、必要に應じて他本を參看した。引用に際しては字體を改めた。記して感謝申し上げる。

八) 永續URIは <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/803316>
九) 永續URIは <http://hdl.handle.net/2027/mdp.39015097034659>
一〇) URIは http://project.lib.keio.ac.jp/dg-kul/fukuzawa_title.php?id=1